

# ぶどうの木

— 第 3 号 —

## 目 次

卷 頭 言	榎本利三郎	1
わが恩恵 なんじに足れり	伊規須泰子	2
雑 草	伊規須泰子	5
息子の手紙	正野貞子	7
恩恵 あふるる記	志岐成久	9
短 歌	正野貞子	14
結 婚 雑 感	尾田 隆己	15
結 婚 雑 感	加田 十代	17
私 の 初 恋	正野 真宏	19
日 々 に	安部 タマエ	27
「みぎわ」 移転記	X.Y 生	28
忘れ得ぬ人々	榎本 利三郎	33
短 歌	榎本 利三郎	36

八幡前田教会

巻 頭 言

榎 本 利 三 郎

わたしたちが見たもの、聞いたものを、  
あなたがたにも、告げ知らせる。

(ヨハネ第一一・二)

わたしたちが、日々の生活の中で、主を前に撞き、右に置いて、見たもの 聞いたもの よく見て、手でさわったものを、お互いに持ち寄って、ここに「ぶどうの木」 第三号が出来ました。

それは、あなたがたも、わたしたちの交りに、あずかるようになるためである。 わたしたちの交りとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交りのことである。これを響き送るのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。(ヨハネ第一：一・三～四)

この「ぶどうの木」にペンを執らなかつたあなたがたにも、この喜びが満ちあふれる事を願っています。

次の機会には、是非皆さん方お一人お一人が一言づつでも 交りのたより を響いて、この喜びをいよいよ豊かなものにと、育くみましよう！ この小さな交りが、主の御祝福によって、皆さん方の又日本中の兄弟姉妹方の心に喜びがひろがり「ぶどうの木」 が成長して、よき果実を豊かに結ぶ様にと祈ります。

1968・10・2

当り前の事と思つたのに

結婚したら子供が生れる、ということは当り前の様に考えていた。しかしいざ自分の番になって、何年も与えられないということにぶっかつて、こういうこともあるものだとはじめて知つた。そのうち与えられるだろう位の安易な気持で過していたが、いよいよ二年、三年たつても与えられないとなると、不安になると共に、やもたてもたまらずほしくなつて来た。子供と交る仕事をしていると、女の本能的な感覚であろうか、子供の体臭を身近に感じるし、はいはいする赤ちやんが、ひざに手をかけたり、甘えてひざに座りに来たり、飛びついて来たりすると、たまらない愛情を感じたりする。しかしこういう気持で神に求めるのが正しいかどうか迷つた。というのは、子供がほしいのは何の爲か？「可愛いから、」「愛がん用として」という気持がないとは言ひ切れなかつたから。しかしほしいという気持に理由をつける必要があるだろうか？「何事も思い煩うな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝してなんぢらの求めを神に告げよ。」「求めよ然らば与えられん。」「祈りをきき給うものよ、諸人にぞりてなんちに来らん。」とある。「祈ろう」有りのままにほしいから求めよう、と考えた。

何故与えられないのだから その事實を知る爲に

祈つても祈つても、少しも確信が得られなかつた。このころになると、ほしくて、ほしくて自分の気持をもて余すようになってしまった。かねてから少し不審を感じていた事があったので、事實を知るために、医学的な方面に眼を向けてみた。というのは口実で、祈って待つ信仰が持てなくて、何らかの人間的な方法でてもと、心の奥で意識があつたかも知れない。相当の嚙

牲をはらい、日時をついやし、得た結論は、子供が与えられる可能性は非常に少い、ということだった。この宣告の時ばかりは、信仰などたなの上に、乗せてしまつて落胆した。深い穴に落ち込んだ様に、立ち上る気力もない程だった。人間的な方法は尽きた。これからこそ神の力を知る為、依りすがら以外はない、と追いつめられてしまった。

さあ、これからが、祈りの勝負だ

これまでは、クリスチャンでも、未信者でも同じだ。これからの歩み方が問題となる。望みなし、とわかつてなお信仰が持てるのこそ、素晴らしい。あのアブラハムの様に、「彼は望むべくもあらぬ時に、なお望みて信じたり。」「……如きとを認めれども、その信仰弱らず」の信仰がほしいと恋った。しかしこれは大変な事だ。すぐ人間的な絶望が、むらむらとわき上って来る。サタンとの戦いだ。こうなってきたら、「子供が与えられたい」という型ある問題よりも、あのアブラハムの如き信仰を持ち得ない自分に負けそうになって来た。とことん弱い信仰である事をみせつけられた。それだからといって投げ出すわけにはいかない。み言葉によって支えられる。「友なるによりては起ちて与えねど、求めの切なるにより、起ちてその要する程の物を与えん。」「落胆せずして常に祈るべき……」  
「我神をおそれず、人を顧みねど、この寡婦我を煩わせば……」  
速かに審き給わん。されど人の子の来り時、地上ひ信仰を見んや」  
サタンとの根比べになつてきた。得るまで成るまで祈ろう、と決心を固めた。目的は何であれ、とにかく祈ることは神との深い交りを持つことになる。祈っていくうちに、先ず自分自身が整えられていく。いっこうに子供は与えられなくても、ぎりぎりした気持が削られ、清水がわいてくる様に、静かな悦びが心にひろがってきた。それはなんと幸なことであろう。そして神の答えを聞いた。「それ神はその独子を賜う程に、世を愛

し給えり」というみ言葉だった。これが子供を与えてくれという祈りの答えなのだろうか？と驚いたが、今までの私の願いは、単なる整えられてない願望であったのだ。神はもっと高い、全部を覆い包む答えをなさったのだ。それに対して、何を言う事が出来ようか。

一時は悦こんだのに

み言葉によって心がゆらく

ある時、ふつとひっかかるみ言葉が思い浮んだ。「然れども女もし慎みて信仰と愛と深きとにおらば、子を生む事に依りて救わるべし。」み言葉は、自分が神の愛のうちに、しっかりとどまっていないと、剣となって背々をさし通す事がある。一時は悦こび全てを、神にまかせていたかの様に思っていたが、又こういうみ言葉を思い出し、ひっかかるという事は、一体どういう事であろうか。では子供の与えられていない女は、みな救はれていないのだろうか？何人か知っている、そういう方を考えてみた。そんなはずはない。でも旧約ならともかく、新約の方は何故このみ言葉が、はっきりと解いてあるのだろうか。このみ言葉にひっかかって、すい分長い間、苦しみ祈った。けれども実際の所、子供は与えられていないが、救われていないとは、どうしても考えられない。「救い」は、もう何がどうなっても打ち消せないものとなって、私のものとなっている。このみ言葉についての自己流の解釈もあるが、それを審く事は遠慮しよう。とにかく、もう一度依りすぎるみ言葉がほしいと思った。その時与えられたのが、ハンナの祈りの態度だった。一途の信頼、「ハンナ心に苦しみ、エホバに祈り、はなはだしく泣き……。ハンナ心の中にもものいえば、ただくちびる動くのみにて戸闔えず……。」自分ばかりみつめず、自分は消えてしまい、神のみ言葉にのみに信頼しきっている姿に望みを得た。こういう煩もんの後、神は驚かし得ないみ言葉で迫って、

下さった。「わが恩恵、なんちに足れり」の誓をどうして疑う事が出来よう。これ以上だだっ子のような祈りが出来なくなってしまった。

又変えるかも知れないが

今までの結論としては

昭和四十三年六月で結婚7年とヶ月になる。子供が与えられないという事は、初めは悲しい事だったが、今では無事なく大きな恵として感謝できる。「神の遣り給えるものはみな善し、感謝して受くる時は棄つべきものなし」だからこの事を通して神は、たくさんの特別な宝を与えて下さった。「是非とも必要なら、与える力を持ち給う御てみる」という信仰、吾等なく与えられた人の味わい得ない神との交り、神御自身を教えて下さった事・・・・・・・・

どんなに力んでも、自分の祈りではだめ！み言葉に立っての祈りのみ力がある。・・・・・・・・等々

まだこの祈りは続くと思う。祈る時「聖霊なんちに臨み、至高者の能力なんちを被わん」と

神の誓にすっぱり包まれて、言い知れぬ平安が追って来るに違いない。

「わが恩恵、なんちに足れり

わが能力は疑きうちに

全うせらるればなり」。

(コリント後書十二：9)

雑 草

伊 規 須 泰 子

保母の手に すがらんとして ふた足を  
思いかけずも 歩みしこの子

母親を 慕いてこの子は 今日一日  
保母の背なで 泣いて過しぬ

しかりても しかりても 寄り来る 幼な子の  
信頼きひし 我鳥かゆえに

抱きみても 負うてみても 泣き止まぬ  
子を持てあまし 心悲しき

泣きし子も けんかせし子も 一様に  
美しき願して 午睡をなせり

この冬の きびしき試練 耐えぬきて  
浜木綿の葉 たくましく伸びけり

目ざむれは 先ず祈りして 今日一日の  
歩み整え ペットを降りぬ

身も襟も濡め 礼拝に出たしと  
土曜の夜を 静かに過しぬ

いら立ちぬ程に 忙がしき仕事々に  
ふと聞えくる 我堂におれ

## 息子の手紙

正野員子

隆士がおか山ミサワホームK. K. に就職してはや二ヶ月になる。筆不祥の息子が珍らしく部厚い封書を送って来た。毎日戦争のような忙しさのため無さたしていること、今建築中の十三家屋の夜警のあい間を見て、この手紙を書いていると言うのである。この寒夜に夜警までしなくても・・・火の気も無い所で、ふる星をしのびつつ書いている姿が眼に浮ぶ。だれか息子のために熱いお茶の一ぱいでも飲ませてくれる人がいるのだろうか、手のとどかない遠い所がうらめしい。現在の会社は危機存亡の瀬渡際にあるという記事は、一層私の心を不安にさせた。建築中途にして破産した下請業者の後始末とその損害は金銭上のみならず期限の延期と、粗雑な建築は手直し手直しして、家主は怒り、会社の不信は大きくひびき、隆士的外交部門は、とざされたかに見えた。読む手がかすかに震えた。それを見透したかのように、「お母さん・・・どうか心配しないで下さい。僕はむしろ感謝しています。こういう事態はうれしい事ではありませんが、高慢にならず、苦勞があつてもやりがいがあります。僕は投げ出されても踏まれても、殴たれても、くじけない強い生命力を持つ雑草のようになりたい。試練に遭つて試めされる時、人の価値がわかります。十の力を十發揮させる事はだれでもできる然し十の者が十五の仕事をやり返すのです。それは無理だと言わねは許されません。成せば成るから不思議です。

信仰とは望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。（ヘブル書十一・1）

信仰も事業も理は同じと思います。僕はやります。命をかけて戦い抜きます。どうか僕のために祈って下さい。」

読み終っても、もう一度一字一字をかみしめながら、隆士の



たぎるような血潮を、感じとろうとした。「社長以下全員一致團結して、夜一時や二時は珍らしくありません。時には徹夜です。貯金は全部下ろして投資しました。給料もしばらく見送りですがだれも文句は言いません。」私は読みながら、隆士が命をかけて困難を乗り越えようとしている尊い姿を思い浮べた。しかし反面倒産の多い昨今、はたして大丈夫なのだろうか、行きづまってしまうのではないだろうか。……。いろいろな不安が私の心をゆさぶった。長男は言う「いいじゃないですか。やりたい事を存分にやらせて置きなさい。失敗したつてまだわかいんだから……。」とそれもそうだし一さいを神様におまかせしようと思い直し、これからもせつせと、聖言を送る事にした。

所で社長とは、一体どんな人であろうか。「<sup>正</sup>生野君は人と違っている、信仰する人は違うなあ。」と社長が言ったと言う事を聞いた。社長さんもキリストを知るようになったら、どんなにすばらしい事であろう。願いは祈りとなり隆士のために祈る。その時聖言を示され早速ハガキの頭書に、念を入れて書き送った。「希望は失望に終らず。」（ローマ書五・ち）……。と

庭先の梅の木が春のおとずれを、まつかの如く寒風にちつと耐えているのが見えた。

昭和四十三年二月二十八日記

「なんちらエホバの恩恵ふかきをあじわいしれ、エホバに依り頼む者は幸いななり」

昭和42年、晩秋の夜ははだ寒い。数輪の菊の花が部屋を明るく和らけてくれる。聖書、賛美歌をはじめて自分のものとして与えた子供たちは、いかにもうれしそうに家持の時間を待っている。やがて7時半となる。「主われを愛す」46ノ番のメロディーが室一杯に広がってゆく。ノ日の業を終えて主と交わるひと時は、なんとも言えぬ喜びであり感謝である。このノ年を回顧してみると、さまざまなことが私共の囲りに、また家族のノ人ノ人の上に起った。主はそのつど祈りに応えたもうた。主のみ名はほむべきかな。かくてその夜の家持は主はこの聖言を啓示したもうたのである（詩34：8）

年あらたまつて昭和43年となる。年頭に与えられたのは「なんちら心を騒がすな、神を信じ、またわれを信ぜよ。」（ヨハネノ4：ノ）この聖言であつた。

この新しい年が私たちノ人ノ人にとって、どのように展開してゆくか。主はいかなる時にも十字架のイエスをあおぎ見て雄雄しくかつ強かれと導いておられる。私共弱い肉体を持つ人間であればだれしも幸福なノ年でありたいと願のが人情でありましょう。でも私共は一生の間いろいろの中を通つてまいります。すなわち暗やみと悲しみと多くの悩みと病いと憤りの中にあるのです。これらのことを思い煩つたとてどうすることもできません。このノ年は強く信仰に立ち、その確信に満され、十字架の主をあおぎ、聖名をほめたたえつつどのような逆境に落ち込もうとも、すべてをエホバに依り頼んで勝利の信の戦いを続けようとお祈りしたのでした。主のノ968年を迎えて詩34：8とヨハネノ4：ノの聖言は聖霊の奇しき力により、私の心の壁に深く刻まれたのでした。

神が聖言のために門を開いて下つて私共がキリストの奥義を語られるように「わたしは実はそのために獄につながれているのである。」(コロサイ4:3)

夜半ふと車の走る音に目が覚めた。「ズキリ!ズキリ!」急部の痛みが身体の自由な動きを束縛する。もう何時だろう。そつと頭を上げて腕時計をのぞき込んだ。/2時半だ。今朝見舞においてになった野村先生、高木先生のお顔が浮んできた。ああそうだったのか、お2人がお帰えりになつてからずつとベットに寝たままだつたのか。痛い!今にも腰の骨が上下に引き裂かれそうだ。毛布と掛布団がなんと重いこと、身動きさえも思うようにできない。寝返りして楽な姿勢をと努めるが脚/本曲げることさえ容易でないのだ。余りの苦痛に耐えかねて思わず「主よ助け給え!」と心の中で叫んだ。すると苦痛の中でもだえ苦しむ自分の姿がおかしくなつた。なんだそのさまは、虫そつくりではないか。お前は虫と違うのだぞ、神の御手になる人間(エペソ2:/0)神の聖靈に導かるる神の子(ローマ8:/4)ではないか。十字架の主を仰いで苦しみに打ち勝て、固く信仰に立ち雄雄しくかつ強かれとの御声が聞えてくる。主は励けまし給うた。「耐え忍ぶことあたわぬほどの試練にあわせ給わず。」(コリント1/0:/3)の聖言と共にやがて苦悶は終つた。/時40分だつた。主の与え給う力は再び安らかな眠りを与え給うたのでした。ハレルヤ ハレルヤ

4月9日、全く予期しないことが私の身に起つたのです。約/ヶ月入院治療の診断が下されたのです。これを聞いた時ハッとしました。医師の説明は不安となつて慄いかつてきました。約/ヶ月休業は家庭生活のバランスを狂わせ、私共には大きな痛手であります。これは困つたものだ、どうしたものかと思案しながら診察室を出たのでした。

外は雨が降り、道ゆく人は何の心配なさそうに見えて、うらやましく思いました。自分／人が不安と恐れのだん底にいるように思われてくるのでした。沈痛な気持ちに支配された私の身体は、ゆつくりと道を歩いていました。フトすずめの羽ばたきに誘われて上を見上げてと、電柱の上から十字架の主の御顔が大きく心の眼に映ってまいりました。その瞬間大いなる力が与えられるのを感じました。「なんちの信仰なんちを救えり」（ルカ／7：／9）なんちら心を騒がすな、神を信じまた我を信ぜよ」（ヨハネ／4：／）。「もろもろ心労を神に委ねよ」（ペテロ15：7）と万軍のエホバは次から次と聖言をもつて十字架の力を与え給うたのでした。もはや一まつ不安もなく戸畑浅生通から西鉄電車に乗った私は、ただ主の導きのままに進む力と十字架の希望が与えられていました。夢の次第をお知らせして御加祈をお願いすべく、早速牧師館に先生を訪ねました。

その夜家では、入院の準備一切が祈りのうちに整えられました。部屋の中には主が支え給もう感謝の喜びで満ちていました。入院して痛い目に会うのに、まるで旅行にでも行くように喜んで……」と子供までがあれこれと手伝ってくれたのでした。

「おれ平安をなんちらに遣わす、わが平安をなんちらに与う……なんちら心を騒がすな、また恐るな」（ヨハネ／4：27）神による平安、何んと素晴らしい賜物でしょう。信仰の勝利が私の心と思いを喜びに満たし、その夜はただハレルヤハレルヤで主の聖名をほめたたえました。「これらのことをなんちらに語りたるは、なんちら我にありて平安を得んがためなり。なんちら世にありては患難あり。されど雄雄しかれ、我すでに世に勝てり」（ヨハネ／16：33）。主に寄り頼む者に聖霊の賜物が与えられたのは感謝でした。

かくて主の御導きのままに平安のうちに入院いたしました。

「すべてのこと感謝せよ、これキリストイエスによりて神のなん

じらに求め給う所なり。」テサロニケ5：18） 主の驚くべき御業は苦痛の病床を、喜悅一杯に満して下さったのです。苦しみのベッドにありながら、ひたすら主を賛美し得た事は、何物にもかえ難い神の賜物でした。病床生活それは苦痛との戦いの毎日でした。立つ、歩く、笑う、せきをする。。。等すべての動作に少なからぬ痛みが伴い、それは筆舌につくし難きものがありました。健やかで順きょうにある時は、私共は神様に対して不そんな態度を取り勝ちてはないでしょうか。私共の刻一刻の生活がみなエホバの、御支配下にあり、神様によって生かされていることを、はっきりと体得することが出来ました。神様の大きいなる恩恵に対して、すべてのこと感謝し、主の聖名を賛美して、主に在る者の喜びを味わうことが出来ました。「なんじ生命の道を我に示し給わん。なんじの聖前には、充ち足れる歡喜あり。なんじの右には、もろもろの快楽とこしえにあり。」詩138：11） この度の試練は、キリストの奥義を悟らしめんと、獄ならぬ、入院生活を与え給うた所の、神の愛の訓練であったのです。（申命8：5 ヘブル12：28 ヨハネ黙3：19） 主の聖名はほむべきかな。 この度の入院期間を通して、主は聖言のために門を開いて下さったのです。

焼きつく様な患部の痛み、それはガソリンをふりかけて、焼かれているような。。。、一寸動くにも相当な苦痛を、寛悟しなければなりませんでした。それがどうでしょう、一夜あけた今日、五月一日は昨日までの痛みは、その大半が除去され、階段も楽に昇り降りすることが、出来るようになったのです。一寸不思議に思われる程の変化でした。治療時の痛みも消えました。エホバの聖名はほむべきかな。「主は彼をその病の床で支えられる。あなたは彼の病む時、その病をことごとくいやされる。」詩41：3） ただただ感謝でした。

朝の治療を終えて、病室で休んでいると、ほどなくして一通の封書が届けられました。それはお見舞のお手紙でした。その中に次の聖言が示されていました。「大いに愛せられる人よ、恐れるには及ばない。安心しなさい。心を強くし、勇気を出しなさい。」(ダニエル10:19) 神様は吉田のおばあちゃん(吉田稻城先生夫人)をして、どうして今ごろこの聖言を送らしめ給うたのか?私の容態はもうこんなに良いのに!もう峠を越しているというのに。いくら何でも、神様この聖言は少し度が過ぎているのじゃないですか。もう私は苦痛も去り、歩くのも楽になったのですよ。・・と一人心の中で聖旨の示される所を考えました。「心を強くし、勇気を出しなさい。」とはどう考えても鈍い心にはピンと来ませんでした。主の聖旨は何処に?もうどう頭をひねっても、エホバのみ心は分かりませんでした。神様は実に誠実にして、恵みに富み給うお方でした。数時間後主の聖旨は、はっきりと示されたのです。「わが義しき右の手、なんじを支えん。」(イサヤ41:10) 主はあらかじめ、聖言をもつて、示し給うて私を支え給うたのです。午後三時ころ、妻心臓発作で一昨日倒る!の連絡を受けたのです。その瞬間私の心は動揺し、否主の十字架をはっきりと見上げることが出来たのです。しばし黙想、祈る力が与えられたのです。「ああ主よ!あなたの聖言に対して不そんな心を抱いたこの不信仰を、お許し下さい。」と祈りました。何という主のご愛、ただただ涙を流すのみ、感謝するのみでした。もう一度お手紙の聖言を読み直し祈りました。

この様にして神様は、病床にある私のショックを和らげて、固く信仰に立ち十字架を仰ぎ見よ!と励まして下さったのです。「われら四方より、患難を受くれども弱せず、せんかたつくれども希望を失なわず」(コリント二4:8)「わが神主よ、あなたの奇しき聖業と、われらを思う御恵とは多くて、比

べ得るものはない。わたしはこれを、語り述べようとしても多くて、数えることができない。」（詩40：5）の聖言が次々と与えられて、主の御愛に感謝しました。主の聖言は、信仰を以て受入れるべきことを、今日はいやという程教えられ、病床にあってハレルヤ、ハレルヤ涙とどまる所を知らず。。。。夕食を終えた私は、ふと今日が水曜日であることに気付きました。祈とう会のある日だ。時計は六時半を指していた。早速、伊藤須先生に電話して、妻の心臓発作を連絡しました。その日の祈り会では、えの本先生はじめ兄弟の皆様が祈りがささげられたのでした。「なんじの信仰なんじを救えり。」（ルカ17：19）この信仰による電話連絡は数時間後に主の大いなる御業となって、病の妻の上に表われたのです。主は祈りに応えて、支え給うたのです。

主の訓練によって、私共の心の碑に次の聖言が刻まれて毎日が喜びであり、感謝であります。この十字架の奥義を悟るところに、信仰の勝利があると思います。

「わが魂よ、エホバをほめまつれ、  
そのすべての恩恵を忘るるなかれ。」

（詩百三：2）

短 歌

正 野 貞 子

湯上りの 心ほぐれし 夏の山  
早起の 朝風かほる せみの声  
干 物 の 取り入れすこむ 大夕立  
お隣も 夕食らしき すだれごし  
クルスの塔 夏山ふもと 汽車の窓  
下た ほきの 舗道もただる 盛夏かな

結 婚 雑 感

尼 田 隆 己

全地よ、主にむかつて喜ばしき声をあげよ。

喜びをもつて主に仕えよ。

歌いつつ、そのみ前に来れ、

主こそ神である事を知れ。

われらを造られたものは主であつて、

われらは主のものである。

われらはその民、その牧の羊である。

感謝しつつ、その門に入り、

ほめたたえつつ、その大庭に入れ。

主に感謝し、そのみ名をほめまつれ。

主は恵み深く、そのいつくしみはかぎりなく、

そのまことはよろず代に及ぶからである。

(詩へる。百)

去る五月二十六日、神と人とのみ前にあの様に、恵みとあわれみを受け、人生のスタートを切つて早や二ヶ月になろうとしています。日毎にあの日を思い出しては尽きない感謝を言っています。主の恵みが、どんなに大きなものであつたか、日毎にその高さ深さが、味わい知らされています。結婚後二ヶ月足らずの現在ですら、結婚前は想像もしなかつた恵みの中に生活させて頂いて、唯唯主のご愛の深さ又ご計画の素晴らしさに、感謝するばかりです。今私が何を一番幸福に感じていふと申すと主のあわれみにより、主を前に置く生活をさせて頂いている、この事です。

わたしは常に主をわたしの前に置く。

主が わたしの右にいますゆえ

わたしは動かされる事はない。

このゆえに わたしの心は楽しみ

わたしの魂は喜ぶ。



わたしの身も また安らかなのである。

(詩へん・十六・五・九)

自分中心の生活をしていたら、それが一番その人の魂を喜ばせそうなものですか、そうではありません。私は結婚を契機としまして、もう一度主の前に置く生活に整えられた結果、魂の喜を感じ家庭生活も安らかなのです。

自分の信仰について考えて見ますと、独身時代の信仰は本当に自分一人だけの範囲でしか考えられず、何かのつびきならぬ事になれば自分の信仰をひるがえす事が出来るといふ事を、無意識にも心のどこかに持っていたのではなからうか？でも結婚を決意する時に、この最後の橋をどうしても落さなくてはならなかったのです。もう自分だけが責任をとれば良いのではない。妻に対しても又その子孫に対しても、私が「信じる」事の責任をとらなければ、ならない。(不信仰な言いかたですが、それが良きにつけても 悪しきにつけても。。。。) 本当に私は信仰の根底から揺られました。本当に信じて良いのか。子供にも又その子供にもこの信仰を受け継がせて良いのか。受洗の時の問題がもう一度与えられました。何を今さらとお笑いになるかも知れませんが、私には切実な問題なのです。主のあわれみと、皆様の断えざるお祈りに支えられまして、もう一度主の前にはっきりと決心する事が出来ました。その決意が出来ると主がアブラハムに約束された約束が、自分のものとなりました。

それからもう一つ感謝すべき事は、クリスチャンと結婚できたという事です。私共クリスチャンにとつて、信者同志結婚する事の恵みが、いかに大きく又重大であるか、又大切にしなければならぬものであるか、結婚後身にしみて分かりました。私がこうした恵みの中に生活させて頂けるのも、信者と結婚できたからだと思えます。以前私はなまいきにもだれと結婚するにしても、自分が主に従っておれば信者でなくても良いではないか！等と甘い考えでおりましたけれども、実際に信者と結婚して、ともに心を合

せて祈り合い、おたがいが主を前に立て仕えあって行くという生活の素晴しさを味い知ると、その生活が素晴しければ素晴らしい程、反対の状態になった時のみじめさ不幸さを思いみる時、毎日毎日が感謝でなりません。この様に信者同志が結婚する事は、私達の信仰生活にとって、どんなに励みになり、力づけられるか分かりません。本当に素晴らしいものです。

私達がこの様に幸福な結婚ができたのは、主の大いなる導きはもち論の事、多くの兄弟姉妹方の長年に渡る篤きお祈りが、あったればこそと深く感謝致しております。そして今後もこの小さな家庭のために寛えてお祈り下さいませ様お願い致します。

昭和四十三年七月記

## 結 婚 雑 感 そ の 二

尼 田 千 代

この度の私共の結婚について「ぶどうの木」に二人で投稿してみよう！ と思いきもかけない難題が、彼から提案されました。自分の思っている事を書いたり言ったりする事の苦手な私は、さてどうしたものかと、長期作戦でがんばっておりましたが無きに等しい者をあえて選ばれたのである。それはどんな人間でも神の前に誇る事が出来ないためである。あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖と、あがないとになられたのである。」(コリント前書一・28～30) との御言葉を彼を通して、主が与えて下さいました。それでこのような事でも主の良き証しになればと思い、祈りつつペンを取った次第です。

人は心に自分の道を考え計る。

しかし その歩みを導くものは、主である。

(しん言十六・と)

神様の不思議な導きのもとに結婚しまして、約二ヶ月 共に心を合せて賛美し感謝し祈るクリスチャンホームの素晴らしさを心から感謝しております。正野兄姉の結婚式に出席させて頂き感激したおの日から一年後に、まさか自分がこうして結婚するなどとは夢にも思いませんでした。クリスチャンホームでもない私が、教会の方のお世話で、クリスチャンと結婚出来るなんて思いませんでした。。。と先日も復興教会でこの事を話しました所、教会の奥様が、毎日早天祈とう会で婚期の兄弟姉妹方の名前を一人ずつあげて、祈っておられるとのお話をうかがい、ああ私の様な者でも、主の前に寛えられているのだと、改めて主のご愛に心から感謝しました。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そしてあなたがたを立てた。」(ヨハネ十五・16) との御言葉通り、この事が主の御旨なのだと思いますと、私達ではどうもい測り知る事の出来ない神様の御手を感じます。又結婚してはじめて家庭というものの本当のあり方を教えられた様な気がします。「それゆえに人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人のものは一体となるべきである。」(エペソ書五・31~32) 私達は神様の愛のゆえに、今こうして立てられているのですから、お互いに神様から受けた愛を交換して仕え合い神様に喜ばれる家庭を築いて行きたいと思っております。

「新しき地に踏み出す  
心に憫えありやみよ。  
ヨシュアのごとく、我も言わん  
わが家とわれは、主に仕えん。」

(リバイバル聖歌・99)

だれにても初恋の思い出というものがあると思います。人間一度は通る関所のようなものかも知れません。人間である以上異性に関心を持つのは当然といえましょう。小さい時から少年小女小説を読むたびに一つのあこがれとして心の中に映じておりました。初恋……。なんと魅力ある不思議な感情でしょう。多くの心夢中になるのも無理はありません。しかし神様に従おうとする若いクリスチャンにとって恋は大きな試みであり問題であります。

昭和三十七年十月、私が二十四才、洗礼を受けてまだ一年をこそこのころでした。私の勤務している保健所に保健婦学校の学生三人が三ヶ月の予定で実習にやってきました。彼女達はわずかな期間にできるだけ多くのものを吸収しようと、クリニックに家庭訪問指導にと一生懸命励んでいました。昼休みになると我々若い者と一緒になってピンポンに興じたりして、所内でもなかなかの評判でありました。実習期間も終りに近い十二月のある日、その日は朝から天気良かったのですが、帰えるころになって雨が降り出してしまいました。私はこういう時のために、かさを用意していますので、ロッカーから取り出して帰えろうとして玄関まで出てみると、三人の中の一人がかさがなくて当惑したように立っていました。聞けば態西に姉がいるので、そこから通っているとの事「それじゃあ私の帰えり道だから送ってあげましょう。」という事になったのです。かさというものは実に不思議なものだと思います。シトシトと降る雨の中を歩くと別にしゃへいはないのに一つの世界を造ってしまいます。若い二人が小さな世界の中で肩を触れ合いながら言葉少なに語らうという、映画の場面にでも出て来そうなロマンチックなムードがそうさせたのか、私はその時以来今まで経験した事のない強烈な心のドキドキを感じたのであります。ところがそれから二日して偶然にもまた同じ事情になったのです。その時も家まで送ってゆきました。以前のドキドキがドッキン

に変化しました。初めて経験するこの思いをどうしたものかと思案しましたが結局これ以上進行させない方が良いという結論に達しました。何如なら彼女は今勉強中であり、立派な保健婦として成長する大切な時期である、横道にそらしてはいけないし、それにあと二週間もすれば学校に帰ってしまうのだからと考えたからです。ところが私の心の中についたこの炎は、自分の理性とは逆に日に日に大きくなって、押えきれないものになってしまいました。仕事していても気になるので机についている彼女の方をチラリチラリと見るし、あらゆる機会を捉らえて彼女の関心を買おうとするのです。私は卓球が得意ですので彼女の前で、うまいところを見せよえとしたのは、いうまでもありません。何とか彼女と接したい、彼女の事が知りたいと願いました。ところがいざ彼女の前に出ると上気してしまつて呼吸が乱れ口までが、いうことをきかなくなってしまう私でした。それでも彼女の方もだんだん好意をもってくれたように思います。彼女の年は二十二才、眼鏡をかけていますが口元に魅力のある人でした。彼女が京都にいた時、カトリックではあるが、教会に行っていたという事を聞いて、あるいは神様が私に備えられた人ではないかと、心をときめかしていました。

しかし彼女への思いがつのると同時に、私の心の片方では「まず神の国と神の義とを求めよ。」(マタイ六・33)という御言葉が絶えずささやいておりました。私がその事に気付いて、神様に御導きを祈ったのは、何日か経った後でした。その時与えられた御言は「すべてのわざには時がある。」(伝道の書三・1)

「今はエホバを求めべき時なり。」(ホセア書十・12) この二つでした。私はすぐその意味解しました。今はそゆうことよりも、まず<sup>神</sup>に従いなさい。すべてに時があります。早産児というのがある。赤ちゃんは十ヶ月母親のお腹の中におれまろしいのにそれを慌てて八ヶ月で出たりするものだからたいがい未熟児となつて一生苦勞するではないか。それと同じだ。語はまだ神様に対する

態度が十分ではありません。まず信仰の理を整えることが大切である。今は彼女を求むべき時ではない。エホバを求むべき時なり。」

しかし当時の私にとって、この御言は本当につらいものでありました。私はすでに彼女を愛してしまっただけで、彼女も私に好意を持ってくれている事もわかっている。これ私にとって本当に素晴らしい事であり、何ものにもかえがたいものであったのです。それを付き合うこともしないでそのままにしておくということは、すなわち彼女を失墜に連るではないか。私は自分のいたらない状態を知っている。エホバを求むべき事もよくわかる。しかし現実問題として彼女を失うという事は身をさかれる程つらく、又それは恐ろしい事でありました。神様に従おうとする時、ある面で厳しい事を要求されるものです。けれども理由はどうであれ、やはり従うべきなのです。私もこの時いさぎよく、男らしく従うべきでありましたが、チョット弱すぎました。従おうとしても、私の感情が強い力で引き止めるので一步も動けません。彼女と離れたくないという感情が私を支配し御言を拒みました。いえ、自分としては拒むつもりで拒んだのではありません。神様は従わなければという思いを持ちつつも恋愛感情に押し流されて、拒むともなく、拒んでしまったのでしょう。あれ程私の心を感動させた御言の力がうすらぎ神様を感じることができなくなってしまうのです。しばらくして私は考えました。「神様は愛ではないか。無理に従えとおっしゃるはずがない。信仰の壘りに従って平らかに思うべし。(ローマ書十二・3)とある余り背伸びするとヒックリこけるぞ。従える部分だけ従えば、それで良いはずだ。それに感情も神様が与えられたものではないか。私が彼女を好きになったのも、神様の御導きかも知れない。神様が警告なさっておられるのは、私が彼女に心うばわれて御前から離れる事を恐れておられるのだ。だから神様を前において交際すれば、たとえ未婚者とであっても良いはずである。もし彼女が神様を信じるようになれば、実に素晴らしい事だ。」私は自分で考えな

がら「なる程これは良ろしい、筋が通っているし、信仰的にも間違った所がない。これこそ私のなすべき事だ。」と自分の考えに合ずちを打ってしまいました。それから最速祈って神様の許しをこいました。けれどもどんなに祈っても、どうも心が寂然としません。神様はまるで壁のように黙しておられました。どうしてだろう。神様が黙しておられるのは、いけないという事なのか。私の考えのどこが間違っているのだろうか。……これから長い煩もんが続くのです。しかし後になってわかったのですが、この時の私の考えは、彼女と交際するという事を、正当化しようとする言訳に過ぎない事を神様は御存知だったのです。もしここで私が一切を委ねて、神様に従っていたならば、神様はこの事を祝福して下さったかも知れません。けれども私はその事がわからなかったのです。

さて彼女とは毎日顔を会わしますので、私の心は痛みました。神様の手を押しつけてまで、自分の願いを押し通す事はできませんでした。何か神様の御意があるのだろうか、今のこの気持をどうすれば良いのだ。……。悩む思いをだれにも相談する事もなく、裏の公園へ行っては「どうしていけないのですか。どうしてですか？」と祈るのが常でした。そうしている内に彼女達は実習を終えて学校へ帰って行きました。間もなくしてお世話になりました。という彼女からの礼状が届きました。文章は平易ですが文字の奥に隠された思いを読みとる事ができました。私はそれに応えて、すぐ返事書こうとしましたが、出してはいけないように思えたので年賀状だけで差しひかえました。このまま離れるともなく離れてしまうかと思うと、やりきれない気持でした。どうして神様は許して下さらないのだろうか。……。ところが幸か不幸か二ヶ月程して、彼女は学校を卒業するとすぐ、小倉のある病院に勤務する事になったのです。私は喜びました。これぞ神の御導きかも知れない

。忘れた思いが再び燃え上って来ました。彼女に会えるという期待が体中をおどるようでした。私はもう一度御導きを祈りました。いやこの時は、御導きを求めないというより、付き合いたいという要求でした。けれども「今はエホバを求むべき時なり。」という以前の御言が浮ぶだけで、ちっとも神様は変わりませんし、いっこうに私の苦しい胸の内も理解してくれません。再び私は壁にぶち当って、立ち止り神様と組み打ちしなければ、なりませんでした。しかし一方では彼女に会う事を切望しますし、このままでいたら彼女の心が離れるのではないかとあせります。又公園などを歩きますと楽しそうな若い二人連れを見せつけられます。一人であるのが恥しい様な立ち遅れた様な気持ちになるのです。そういう時彼女に電話をかけた事もありました。すると後で罪を犯したのではないかと責められるのです。私は心の中で反問しました。女性と付き合うのが何如悪い。私も二十五才、彼女を持っても良いではないか！他の人にはできて、どうして私にはできないのだ。クリスチャンには自由が与えられているはずだ。あれがいけない、これがいけないでは、まるで律法の奴隷ではないか！もち論自分の好き勝手にやって良いというものではない事は良く知っている。しかし私の様にチョットした事にも道から外れないように、細心の注意をはらい、また罪を犯すことなく手を洗う（詩七十三・13）のはどうだろうか。それでは融通性のない片寄った人間になりはしないだろうか。ヤコブを見つめてみる、結構好きな事をやっても神様はちゃんと導いていらっしゃるではないか。私はもっと凶太くなって、いろんな経験をすべきだ。失敗してもそこから立ち上れば、それも益になるのだから。とにかくこんな事でクヨクヨ思ふのはバカらしい。」私の信仰は落ちてしまっ、信仰している事が邪魔になった事もありました。それから公園や山に行こうと彼女を誘い出しましたが、不思議な様にいろんな都合が起って一度も実現しませんでした。（今考えると神様がとどめなされた



のだと思います。)自分の思う通りにならないと、私はあせりました。彼女は僕をきらいになったのではないか、他に好きな人でも出来たのかも知れない、僕は貧乏だし、男らしい所もないからと自分を見ては嘆くのでした。そういう風で私は全く弱くなってしまって、そこから抜け出す事も出来ませんでした。ところがある晩決着をつける時が来ました。机について聖書を読みながら、いつとはなしに彼女の事を思いめぐらしていると(いつもこんな状態でした)フト自分は神様より彼女の方に仕えているのではないかと、神様よりも彼女の方を愛しているのではないかと、思い当たったのです。その時です「あなたの愛する者を私に渡しなさい。」と神様から迫られたのです。私は反射的に「いやです。」と答えたのです。けれども神様はこの時、ねんごろにアブラハムの信仰を思い起させて下さいました。アブラハムは神様から、「あなたは、あなたの愛する一人子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼をはん祭として、ささげなさい。」と求められた時、「アブラハムは朝つとにいで立った。」(創二十二)とあります。私はこの時、神様を恐れるという事を、また従うという事が、どういう事であるかを学びました。自分は神様に従うと言いながら実は、神様を従わせようとしていた事、彼女を自分一人のものにして、神様には手も触れさせようとしないう、自己中心・・・すなわち君は神様を敬う心もなければ、信頼もしていないのだ・・・と示されたのです。私は彼女を神の祭壇にささげようと決心しました。その時「そんな事をすると、彼女を失うぞ！彼女は君が好きなんだ。君を呼んでいるのだ！」という声が心の中に起りました。私はその声に後ろ髪を引かれました。アア！！そうしたい。彼女を失うのは実につらい。・・・短い間でしたが、激しい戦いがありました。危うく引きずりこまれそうになった時、後ろを振りかえってはいけないと、御霊が助けて下さいました。ついに私は「よし、例え彼女を失っても構わない。

「神様を信じよう」 思い切って一步を踏み出して神様を見上げました。「神様わかりました。今後は従います。彼女をあなたにお渡しします。どうぞ御自由に取りまっ下下さい。私はあなたのなさったことに従います。……しかし、主よ、もし私の願が許されますならば、もう一度私に与えて下さい。けれども私の願いでなく、あなたの御旨がなりますように……」 涙と共に祈った時、私の心に言い知れぬ平安と喜びがわいてまいりました。それから再び彼女に連絡することはありませんでした。再々彼女を引きもどそうとする思いが起って来ました。けれどもその都度神様に献げて、神様に従う態度を整えることに努めました。数ヶ月はまたたく間に経ちました。そしてある日、彼女が他の人と婚約したと言うことを耳にしました。私はそれまで件様にまかせていましたが、あるいは時が来ればもう一度与えて下さるかも知れない、という一粟の望みを待っていましたから、この知らせを受けた時はさすがに失望しました。やっぱり神様の御旨ではなかったのか。残念だ！！……けれどもすぐ神様を見上げました。「エホバ与えエホバ取り去り給う。エホバの御名はほむべきかな」。(ヨブ一：21) 神様は私の為が一番良いことをして下さったのだから、もはや後をふりかえるようなことはすまい。前のものに向かって手を伸ばしつつ進もう。……こうして私は立ち上ることが出来ました。

これで私の初恋物語は終りです。

今ふりかえてみて、神様は真実に導いて下さったことを感謝する者です。もしあの時神様が「そのなすにまかせよ」と放蕩されていたらどうでしょう？間違いもなく

欲望のままにつっ走っていました。その結果は信仰を失  
い又彼女を幸福にしてやるどころか、かえって不幸にし  
たでしょう。世の中にそういう事件があまりに多いよう  
です盲目になって走っていた私に、神様は愛の干渉をし  
て下さいました。「すべてのことに時があり」「今はエ  
ホバを求めべきなり」この御言が私を縛りつけました  
。私は不自由な為もがき、文句も言いましたが御言は変  
りません。ついに神様の祝福が大切であるということ  
を悟らせていただきました。さらにこのことを通して、人  
間の愛のはかないこと、結婚とはどういうものであるか  
。神様が求められる信仰とはどういうものであるか等、  
多くのことを学びました。そして最も大いなるものは、  
神様に従えた！という喜びでありました。

それから数年経った昨年五月、神様は私の為に助け  
人を備えて下さいました。すべては神様の手の内にあり  
神様が導かれることを思います。

今机に向ってこの手記を書いている私のすぐ横で、  
妻は初産を裁っております。もうすぐ私達に子供が与え  
られるのです。

「どうか彼らが、主のいつくしみと

人の子になされた くすしき御業の

ために 主に感謝するように」

(詩 / 07 : 8)

日 日 に

安 部 タ マ エ

一月十三日

主人が疲労はなはだしく、職場から帰って来ました。体温三十七度八分でやや熱があります。以前から食欲不振気味でしたが、先日も胃が悪いからといって、開業医にかかり、バリウムを飲んで胃透視を受けた矢先でした。

職場の方も一度に三人もやめて、忙がしくてたまらない時に、仕事を休むわけにはいかないと申します。余病でも出たら大変だと思えます。翌日は聖日でしたので、えの本先生にお祈りしてもらおうと思いましたが、あいにく先生は大ほり教会へお出かけになって、おるすでした。奥さんにお話ししたら、祈って下さいました。「思いわずらうな、なんちら心を騒がすな、神を信じまた我を信ぜよ」 「エホバはねたむ神なればなり」 「まことに、わが正しき右の手なんちを支えん」 新春に与えられた御言でした。「はい、ありがとうございます。」とおまかせ致しました。

その後、主人は休みをとって、家の保証人に雇主が立ってもらっているのを、他の人に変えるとかといって家を出て行きました。私は木曜会に出席し、そこで先生に祈ってもらい、そして帰ってみると、主人は「アパートの係員がるすだった。」と、いってお茶を飲んでいました。無事で何よりでした。その後はそれっきりになっています。

二月十七日ごろより私が病的な空腹を寛えました。

三月一日 あやまって右のくすり指のツメを3分の1そぎ落しました。それらの事をみんないやして頂きました。

「力は神にあり」 「もろもろの民のやからよ、王に帰せよ 栄光と力とを王に帰せよ」

七月三十一日

主人が賞与をもらって帰りました。東芝に支払完了、家賃を二ヶ月分、お菓子屋さん、米屋さん、野菜屋さん等等それぞれ支払をしてくれました。「疲れたるもの、重きを負えるもの、我に来たれ」 エス様におすがりしておれば大丈夫。愛とあわれみ深いお方が、きっと良くして下さると信じております。

ヨハネは「神の言と、イエス・キリストの証しと、すなわち自分がみたすべての事を証した。」とありますが、第一私が命の聖言に依って生かされている事。又大さかにいらっしやる加とう兄弟姉妹、丸山兄弟姉妹の魂の渴きを、えの本先生を通していやして下さる事、山田姉妹の救われていらっしやる事、前田教会においでるお一人お一人が、このお方によって、救われていらっしやる事と思います。

「我知れり、なんちらもくすべし」エス様は生きておられます。「地はあなたの、み葉の実をもって満される。」

エス様のお意で、日々思いつくまま、ペンをとらせていただきました。

### 「みぎわ」騒動記

X Y 生

主はわたしの 牧者であって、  
わたしには 乏しい事がない。  
主は わたしを 緑の 牧場に伏させ、  
いこいの みぎわに 伴われる。

(詩 二十三・1・2)

思えば、前田教会週報の歴史も、教会の歴史と共に、齡を取ったものである。そもそも週報の誕生は、教会堂献堂の年であった。それは河本実兄の発案に由るものである。

当時まだ物資の乏しい時代だったから、良くもこんなに初められたものだ、と、今更ながら感心する。当時、河本商店の古い謄写機を借りて作ることにした。だが切角の発案も、用紙が無いのでハタと行詰った。ところが不思議！神は隣みにより、主の御用の為とならば、全ての必要を満し給うお方で、サラ紙だけでも少しずつ与えて頂いた。更にもう一つ、素晴らしい葉書型の可愛い謄写機一式が与えられた。当時九百円だから、乏しいには全く思いもよらぬ高価な貴い物がささげられた。この時の喜びは、本当に忘れられないものとして、今も思い出となっている。二人はいうことの出来ない感謝にあふれて、毎週造ったことである。実兄が奇麗な文字で、原紙切りをして下さったので、小生がこれを印刷した。最近まで初の一号があったが、今日探してみても、どこに入ったのか、迷子になったか、見当らないのが全く残念で仕方がない。一年も経ってからだと思ふ（余り当にならぬ記憶だが・・・）実兄が突然言い出された。「週報に名前をつけて響いたら、どんなものですかね。」と言われて、成程、良いな！「何とつけますかね？」二人はあれやこれやと、勝手なのや、面白いのを並べてみた。

ある日、フト心に浮んだ名前は・・・・早速実兄に話してみた。それが詩へん二十三・2である。「エホバは我を 緑の野にふさせ、いこいの みぎわ にともない給う。」

「みぎわとは、本当にぴったりふさわしい、これに決めましょうや！」ということて名前は生れた・・・・そして今日も現存しているのである。

土曜日ともなれば、夕食後みぎわ印刷にかかる。一人がガリパン切り、一人が印刷と交替でやる事にした。かくして、みぎわは誕生したが、皆様の為にはどんな働きをしたのか、はなはださびしい。ある時は沢山余ったり、ある時は不足したり、集會中に追加印刷したりした事もあった。今では「報告の欄」が当時「おしらせ」と響いて、何か二・三あったと思う。ある時には、用紙不十分とみて、応援の差入れがあつて、如何に励まされた事か。井上兄（現在井上硝子店主人）が、総理庁統計局消費者価格調査現在支出記入票と言う、長々しく、いかめしい代物？を持参してくれた。紙は黒いが裏を返せば、立派な過報用紙となった。これを無料提供して頂いたので、用紙についての不足は補はれた。誠に感謝感激であつた。この紙で造られたみぎわは今も残っていて、小生には全く懐かしい物となっている。何しろ素人と言っても、スブの素人がやる仕事だし、おまけに仕事の間やるその働きが、全く内容も出来上りも、はなはだまずくて、みられたものではなかつた。（今でもそれは、言える事だか・・・）下手な字をカムフラージュするために、カットを入れてはどうかと、がらにもない、花や様々のカット集を眺めて、自分ながら何とか美しく楽しく見て頂こうと努めてみた。不本意な出来でも、おかしなものでも、おかちめんこでも、神が祝福して下されば、これこそ生命の水のみぎわともなるだろうと信仰を持った。皆さんも、そう信じて受取って下さつたと思う。

さて又素晴らしい事が起つた。真白な用紙が与えられる時が来たのである。トス黒いサラ紙が、真白い紙になった時のうれしさ！下手な字でも何だか一段と美しく見えて来た。当時一枚一円の用紙だから大したものである。これを六等分したら、過報の一枚原価は、十六銭強であつた。

クリスマスやイースターには、今ごろなら印刷した、鋳  
造入のプログラム用紙が、簡単に得られるが、その時は十六  
銭某の紙ではさみしいので、何か奇麗なものをと探したら、  
丁度良いものが見つかった。それは病院で使用されるレント  
ゲン写真の、印刷紙包装に使はれた黄色いのと、青色のかな  
り広い紙が手に入った。家内の妹が病院に勤めていたので、  
特別な事情を話し、分けてもらった。これも無料で エホバ  
・エレ で備えられた。これを用紙半切大にし、二つ折で、  
表紙はそれにふさわしい様な画を書いてみた。

もうそのころ、みぎわもティン・エージになっていた。  
河本兄も東京に転出されていて、小生一人ポッチになってい  
た。とにかく十分でなかったが、一生懸命に走って来たので  
ある。 . . . . .

さて二十九年の夏だと記憶しているが、市の教育委員会  
主催のガリ版講習会が、戸畑で開かれた。これぞ！と申しこ  
んだ。 . . . 所が何と会費がタダの五十円、喜んで、仕事  
が終わってから、飛ぶ様にして出席受講した。何とか少しでも、  
みぎわの字が見られる様になるならとの願いからである。  
色々な技術的な事に、手も頭もついて行けなかったが、とに  
かく全力努めた。速成だから大した事もないが、みぎわの  
書体は一変した。然し充分とは行かぬまでも、どうにか囲り  
なりに今日にいたっている。

それは、はなはだ不完全なものだが、神は祝して下さっ  
たと信じている。初めの内は、書いては破り又破り、家内が  
横からこごとを飛ばしたものである。

その後、手製の鑄造型の謄写版一切を造る等したが、こ  
れは今では息出の品となって押入に蟄居している。オンボ  
ロになってはいるが、誠に懐しく、愛着限りないものである。  
。



ゴシック字体に変えたのが、昭和二十九年の秋と覚えて  
いるが？ その暮のクリスマス、又一っ何か と願ってい  
たら、バプテスト教会のバザーで買ったクリスマス・カー  
ドの画を表紙にした。一枚ずつ色を塗るのに、家内が応援  
してくれた。 ある時には、黒い紙の表紙に、黄色のイン  
クで、ヒイラギをすって、赤いリボンもつけた事もある。

三十七年には、エッチングを利用した、小さい物 も  
作って見た。これも家内が応援してくれた。随分懐しい思  
い出となった。 主はここまで我を助け給うたのです。

寒い冬の夜コタツの中で、夜の更くるのも知らず、  
ただ みぎわ 作りにいそしみ過した。 夏の夜は汗みど  
ろな顔や手に、インクの化粧をして、何と楽しかったか分  
らない。 今ではクリスマスもイースターも、写真版の週  
報用紙で、これ又有難い事ではある。

遂に昭和四十二年八月二十七日らら号をもって、みぎ  
わ の小型版刷りの最後となった。 何だか、チョッピリ  
別離のさみしさに、にた気もした。 九月三日らら号から  
用紙半切と大型に生れ変わった。内容の字を大きく、見易くす  
る為である。今ふりかえって見れば、豆みたいな週報だが、  
よくも二十年間続いて、皆さんの礼拝に列席した事である。  
小さい、ささやかな週報が、あるいは皆さんの聖書の中で  
神の細い小さな御声を語ってくれたかも知れない。 報告の  
様をみていると、教会史の一コマコマが、次々と今も新し  
くよみがえって来る事だけは、事実にある。

今年三月三日（○）号から更に内容が変わり、集案案内や、  
祈りの課題等報告の他に出来て、三段に分けた。今後又内  
容は次々と充実するであろう。 ともあれ、小さな みぎ  
わ よ。もっと もっと 大きく榮耀しく成長してくれよ。

諸兄姉方、応援下さって感謝です。引き続き可愛がって、倍旧の御後援を、又お祈りを切に願い筆を置きます。

なお、切角替いた過報を、持参する事を忘れて、大変ご迷惑をおかけした事、数度、又切角替いた報告がミスであったり、眠りながら原紙を切って妙な字を、又誤字を並べたり、誠に赤面冷汗の事ばかり、未筆ながら御容赦の程、偏に重ねて願ひ上げる次第である。

限りない主のみ恵を、深く感謝します。

忘 れ 得 ぬ 人 々

榎 本 利 三 郎

髪にくし目も奇麗に、色白な丸顔、澄んだひとみ、柔和な表情で小じんまりした口元、しわ一つない着付、整った人形の様な姿に、こんなにも清疎な装が出来るものかと、しみじみと見とれる姿、独特の山口なまりで張りのある声で「先生、どうぞどうぞ、よう来て下さった。」と喜びを満面にたたえて迎えて下さった、下川さかき姉というより、下川のおばあちゃんという方が身近な感じがします。

初めてお目にかかったのは、昭和七年ころ門司でつる原さんの家庭集会の後で、お訪ねした時でありました。洋太さんは、久る米ガスリの良くに合う紅顔の美少年（ではなく美青年でした。）の様に若々しく、年に似合わず落ち着いた、思慮深い言葉に感心させられ、度の強い眼鏡が印象的であった。そのころおばあちゃんは、脚が曲らないで座れなく、長年御不自由しておられたのでした。つる原姉の家庭集会に出ておられた洋太さんが、神ゆ の話を聞いて、是非おばあちゃんも

祈って頂きたいと、折滝先生を招いて、全家族で 十字架のあがないの話を聞いているうちに、長年どうしても座れなかった左脚を曲げて、本人も気付かないうちに正座しておられたのでした。その時から全家族を挙げて、活ける主を信頼して来られたのでした。

昭和十五年（洋太さんが結婚されて、余り年が経ってなかったのでは、ないでしょうか？）老松公園の近くの新川町（？）で味その御問屋をしておられた時、間口より奥行のある家で、お茶を<sup>いた</sup>いたのも、つい近年の様に思われますがもう二十八年の昔になりました。

門司におられたころ、「先生、女は朝起ると寝るまで、時間がありませんので、神様には誠に御無礼ですか、私は起ると顔も洗わないで、口もすすがずそのまま床の上で「神様口もすすがず、顔も洗わないで誠に御無礼ではございますが。。。。」ってお祈りし、聖書を讀んで床を出る事にしました。顔を洗いに立つと、一寸ガスに火を点けて、次に。。。。と顔を洗う時間にも、何かしながら とつい次々と仕事に追われて、一日中気になりながら祈る事が出来なくなり、力が抜けてしまいます。それでこんなにして、祈る様になりました。」と喜こんでお訛しして下さった。さすが明治の人で神様に対して、誠実に一日の最初の時間を主にささけて、真剣に主に信頼しておられた姿は、今も多くの人々を励ましてくれます。 家族の救いに心を砕いておられました。妹さんの山中くに姉は門司で同居して居られましたが、娘さんが朝鮮に居られたので戦争中に行かれぬした。おばあちゃんも大変心配されましたが、無事引揚げて、東郷で近くに住んで居られました。当時、東郷の平清水の、吉武兄の家庭集會に時々まいりまして、その都度お訪ね致しました。山中姉

もイエス様を救い主として受け入れ、喜んで二人の労働者が王を崇めておられた姿、尽きない王の御愛を語り合っておられた姿、美しい絵を見る様な思いがしました。

下川兄の入隊、出征中豊子さんを励まして留守を守り、孫の世話をしながら、戦時中の困難を乗り越えて来られました。戦後の食糧難の中を、お孫さんを学校へ出すからと、十を越え大腰の曲ったおばあちゃんが、ポンプを突き七輪を起して炊事しておられる姿を見て、痛々しく感じた事もありました。「先生 孫は可愛いいてすからね。」と老いの働きの厳しさも笑いに紛らしておられました。集会の行き帰りにはお訪ねし、祈って（我歌三：ひと～ひと）で励まして差し上げると、大変喜んで「元気出します」と明るくなりました。常に喜べ、絶えず祈れ、すべての事感謝せよ。

（テサロニケ第一：五・10～18）

之はキリスト・イエスに在って、神が私共に求と給う御旨だと記されています。おばあちゃんの晩年はこの御言の見本の様でした。耳が大部遠くなられた時も「先生私はまだ目が見えます。有難いでうね。」と耳の聞え難い事を悔むのではなく、目が見える事を喜んで感謝しておられました。

祈る事と聖書を讀む事を健康の許す限り続けておられました。お目にかかると必ず「先生とお会の為にお祈りさせて置いております。」とおっしゃっておられました。

私の為を以て支えて下さった聖徒方が、一人又一人と天に召され、支柱が一本ずつ外れて行く様な気がします。しかし主はまた新しく聖徒を励まして、私共の為に祈る人々を遣し聖言を全うして下さる事を思います。

かたて受給いして、人様に迷惑をかけないで台して頂きたいと祈っておられました。王はその心の解いに応えられ、病

気もなくアブラハムやヨブの様に日満ちて、人手をほとんど  
煩わさないうて天え召されて行かれました。

聖徒の死は聖前にてとうとし（詩百十六：15）

短 歌

榎 本 利 三 郎

湯の町の 窓辺に寄れば 森の木に  
群がる鳥も 安らげく見ゆ

夕まぐれ 庭木につゆの 煙れども  
こずえに鳥の 声ぞ柔しき

海溶けて ふたすじみすじ いそ波の  
插けるしまの 白さ目にしむ  
（別府にて 七月）

「ぶどうの木」 良き果ゆたかに みのれかし

育て肥ゆれと 今日も筆執る

幾年か 祈りし願い かなえられ  
聖書ひもとく 今日ぞうれしき

病らえは 果しはなけれ 我か思い

聖手に委ねて 王にぞ近づく

夕暗みに 香る木梢 ゆかしくも

路行く人の 心なごむる

いつ見ても 変らぬ広さや 別府灣

舟は消えゆく 線の彼方に

（別府にて 十月）

### 編 集 後 記

神様の豊かないつくしみとお導きによりましてここに「ぶどうの木」第三号を発行する運びとなり大変に感謝です。皆様の篤きお祈りありがとうございます。

本号は タイプ 印刷 製本 と皆私選の手でやったものですから、思わぬ時間を取り発行が遅れ皆様に大変御迷惑をおかけしましたことを深くおわびいたします。又その努力にもかかわらず、かなずかいや文字の誤りその他印刷等の不明確な所があり誠に読みにくいものとなってしまいました。充実した原稿をお寄せ下さった方は待論、読者の方にも大変申し訳なく思っております。

次号からも、私選の手で全てやりたく願っていますから、皆様この為に寛えてお祈下さい、又原稿もどしどしお寄せ下さい。

S 4 3 . 1 0 . 2 7

印刷 昭和43年10月23日

発行 昭和43年10月27日

発行 八幡前田教会

編集 正野 真 宏  
尼 田 隆 己